

宇野浩一全集

第九卷

宇野浩二全集

第九卷

宇野浩二全集 第九卷

定價一五〇〇圓

昭和四十七年十二月十日印刷
昭和四十七年十二月二十日發行

著者 宇野浩二

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

©一九七二 檢印廢止

宇野浩二全集 第九卷

目次

自分一人	七
相思草	一〇三
大阪人間	一五二
寂しがり屋	一九七
友垣	二三一
自分勝手屋	二〇三
人間同志	三九
戯曲	三三
暁の歌	三三

童話

搖籃の唄の思ひ出　海の夢山の夢　向ふの山

龍介の天上　春の日の光　晴れ渡る元日

落の下の神様　アイヌ爺さんの話　福の神の

正體　胡桃とチュリツプ　熊虎合戦　王様

の嘆き　蚊とんぼ物語　黒と白の戦　人に

すぐれた藝　雪だるま　春を告げる鳥　石

の渡し　暑中休暇の日記　曲馬團の少年

王様と靴直し　二人の按摩　ピッチョラ

勝つ話と負ける話　話を買ふ話

あとがき

小說
九

自分一人

一ノ一

お仙は、ふと、夫の丈三郎が、息がきれてゐたことに、氣がついた時、自分も、息が、たえるやうな氣がした。

つい二三時間ほど前に、とつぜん、「……お仙ツ、」と、びつくりするやうな、大きな聲で、さけんだ夫が、今、なれな寝臺の上で、かけ蒲團から、頭を、半分ぐらゐ、のぞかして、しづかになつてゐる姿を、はなれたところから、見るともなしに、見ると、お仙は、正體なく、その場に、泣きくづれた。が、すぐ、泣きやんだ。さうして、泣きやむと、たちまち、お仙は、にはかに、『ひとりぼっち』になつたことを、今さらに、しみじみと、感じた。しかし、また、すぐ、いつまでも、くよくよしてゐる時ではない、と、おもつて、お仙

は、ふるひ立つた。

時は、十月も、末頃の、夜の十二時すぎである。

所は、埼玉縣の、浦和の、『なにがし』といふ、(東京の上野の公園のちかくにその本院のある) 精神病院のなかの一室である。

浦和といつても、北浦和の町はづれであり、夜もいたくふけてゐたので、病院の中は、もとより、あたりは、なんの物音もせず、死んだやうに、深閑としてゐた。

まして、部屋のなかは、ひっそりとして、しいんと、しづまりかへつてゐた。さうして、しんしんと、寒くて、冷めた

い。

お仙の寢床は、丈三郎が横たはつてゐる寢臺からすしはなれたところに、しいてある。

お仙は、その寢臺のそばに、立つてゐる。しかし、寢ようとしても、どうしても、眠られない。寝る氣になれないからでもある。

せいぜい四尺四五寸ぐらゐの、小女の、お仙は、ふと、寢臺のはうを、むくと、自分の目とほとんど同じぐらゐの高さのところ、一間ほどはなれたところに、もう動かない丈三郎の寢姿を、いやでもおうでも、見ることになる。生前、六尺ちかい大男であつた丈三郎は、前後十年ちかい長わづらひをしたせゐもあらうが、見るかげもなく、小さくなつた。

寝ようと思つても、どうしても、寝る氣になれなかつたのは、いたつて冷え性のお仙が、部屋のなかの凍みるやうな冷めたさに、ふるへあがつたからでもあるが、しかし、そればかりではない。お仙は、妙に、目がさえて、眠れなかつたのである。

お仙は、寢臺の上で、かけ蒲團から、半分ほど、出てゐる、丈三郎の、きふに小さくなつたやうに見える、頭が、目につくと、そのたびに、涙が、こみあげる思ひをした。それは、なんとなく、ものあはれに、見えたからである。が、それも、しだいに、なれてくると、お仙は、こんどは、なんともいへぬ、やるせなさを、感じた。それから、急に、氣もちが、いらいらしてきた。やがて、氣がくるふのではないか、と思ふやうな、おさへきれない『いきどほり』の心が、急激に、もえあがるやうに、わき出した。

夜は、しだいに、しんしんと、ふけてきた。

お仙の、金壺眼のやうな、小さな、そのくせ、底に、（奥のはうに、ふだんに）冷めたい光りをたたへてゐる、目が、今、一そう異様に、青く、きらきらするやうな、つめたい色を、おびた。さうして、その『いきどほり』の心は、お仙の、小さい體ぢゆうに、波うち、小さな顔の形相にも、あらはれた。それは、謡曲『葵上』のなかの、「唄悲のはむらは身をこがす。」あるひは『傾城佛の原』のなかの「唄悲の毒蛇く

るくるくる」などといふ文句を、おもひださせる。

夫の丈三郎が、持病の痔を、（これまでのうちで一番ひどいのを。）おこして、はじめて、入院したのは、昭和五年の秋の中頃であつた。丈三郎が四十一歳、お仙が三十六歳の年である。

それまでは、この持病が、おこると、ずつと、賣藥で間にあはせ、患部の『てあて』は、みな、お仙が、した。

丈三郎の痔は、はじめは、痔血（あるひは走り痔）であつたが、それが、しだいに、ひどくなり、どうしても入院しなければならなくなつたのは、ひどい脱肛になつたからである。しかし、それも、はじめのうちは、肛門の外にとびだした粘膜の『しまつ』と『てあて』を、一切、お仙が、した。が、なにぶん、患者の丈三郎が五尺八寸ぐらゐの大男であり、その『てあて』をする、お仙は、さきに述べたやうに、四尺四五寸の少女であつたから、いくら、醫者の費用をはぶかう、入院などしないで、と思つて、齒をくひしぱりながら、大きな重い丈三郎の體を、もちあげたり、痛がる丈三郎のふとい重い足を、ひらかしたり、したが、それが、しだいに、出来なくなつてきた。そのうへ、患部の『てあて』をするとき、なれてゐながら、ときどき、『へま』をやつて、丈三郎に、大きな聲で、どなられたり、ひどい力で、なぐられたり、し

た。しじゆう、氣は、はつてゐるつもりでゐても、睡眠不足がつづき、根がつよくない體がひどく弱つてゐたからである。

そのうちに、丈三郎は、しだいに、元氣がなくなり、さらでも青い顔が、いつとなく、蒼白になり、やがて、血の氣がほとんどなくなつた。なれてゐるお仙も、さすがに、心配でたまらなくなつたので、思ひきつて、近所の醫者を、よんだ。丈三郎が、もう、あるけなくなり、お仙も、丈三郎をせおつてゆく力が、なくなつたからである。

醫者は、頸をひねつて、丈三郎に聞こえぬところで、心臓もわるいが、微毒性のものであり、「あのままで、おいとくと、あぶないから、ぜひ、入院させなさい、」と、いつた。

そこで、お仙は、大家の長男が、本郷大學病院で事務員をしてゐることを、思ひ出したので、さつそく、その晩、その長男を、たづねた。さうして、丈三郎は、その翌日の朝、その病院の診療科に、はひつたのであつた。

「治療、治療、治療、」と、お仙は、つぶやくやうに、いつた。

かうつぶやくお仙の顔は、ゆがみ、その顔に、とげとげしい『にくしみ』の表情が、『しわ』のやうに、きざまれた。

その頃、丈三郎は、日暮里の裏町で、魚屋をやめて、玉子屋をし、かたはら、泥鰌を、賣つてゐた。もつとも、丈三郎は、店を、ほとんど、お仙に、まかせ、自分は、午前ちゆう

は、（朝はやくから、）自轉車にのつて、淺草の、色町の料理屋と、公園の中の『うで玉子屋』に、玉子を、配達し、午後には、その日ぐらしの大道商人である、『うで玉子屋』が歸つてしまはぬうちに、集金にまはる、——と、かういふ仕事を、毎日、やつてゐた。この自轉車を乗りまはしたことが、丈三郎の持病を、かういふ状態になるまでに、わるくしたのだ。

丈三郎は、入院してから、一週間ほど後に、大手術をした。手術後の経過はよい方であつたが、なにぶん稀な手術であつたのと、入院するまでに、體が、ひどく衰弱してゐたので、丈三郎は、手術をしてから、まだ、一と月あまり、入院してゐた。さうして、やうやく退院することにきまつた時、丈三郎は、醫者から、これからは、自轉車に乗ることは、絶対に、いけない、と、いひわたされた。

丈三郎は途方にくれた。お仙も思案にあまつた。

お仙は、これまで、ずつと、丈三郎の『かせぎ』だけでは、たつた二人きりであるのに、どうしても、『くらし』が、たちかぬたので、一ばん得意の仕立て物は、もとより、『髪ゆひ』まで、やつた。それから、丈三郎が玉子屋をはじめてからは、お仙は、店番をしながら、玉子焼を、自分で、こしらへて、賣つた。が、それでも、まだ、たりないので、泥鰌も賣ることにして、お仙は、その泥鰌をさくことは、もとより、泥鰌の『かばやき』まで、こしらへて、賣り出した。

しかし、いくら、『意氣地なし』とか、『甲斐性なし』とか、いつても、やはり、男であり、夫である、丈三郎の仕事がなくなれば、いくら、氣丈な、負けずぎらひの、お仙でも、手も足も出ない。

ところが、ちやうど、その頃、一年ぶりぐらゐで、丈三郎の妹の、お倉が、夫の佐山と一しよに、病氣の『みまひ』と無沙汰の『わび』をかねて、やつて來た。

お倉は、丈三郎に似てゐて、體も、顔も、大きく、唇のあつところから、齒の大きいところから、もののいひ方が、がらがらしてゐるところまで、丈三郎と、似てゐる。

さて、一年ぶりぐらゐで、お倉を見た、お仙に、まつさきに、目についたのは、お倉が上等のお召をきてゐる上に、指輪を二つもはめてゐることであつた。それに、お倉は、好み、人一倍、派手であつたので、一そう、目に立つた。それだけでなく、もとより、あまり澤山なかつた著物を、ほとんど、質に入れて、なくしてしまつた、お仙には、お倉の様子、なほさら、けばけばしく、いやらしく、はては、にくらしく、見えた。

お仙は、お倉の話し相手になりながら、しばしば、とんちんかんな返事をした。

佐山の父は、まづしい古著屋で、丈三郎が、父の八右衛門と、淺草の馬道で、魚屋をしてゐた頃、すぐ近所に、住んで

ゐた。佐山が、お倉と知りあつたのは、その頃であつた。

さて、佐山は、二三年まへ、お倉と、普通以上に、したしくなり、無斷で、父の家を、とびだして、本所の縁町に、所帯を、もつた。さうして、その借りた家が、ちやうど、町の角にあつたので、佐山は、これは、商賣をするのに、『もつてこい』の家である、とおもつた。しかし、佐山は、まづ、あまり元手のかからない、寫眞の『現像、焼附』の看板を出した。これは、佐山は、子供の時分から、寫眞器をいぢつたり、寫眞をとつたり、することが、なによりも、好きであつたからである。

佐山は、五尺一寸ぐらゐの、やせた、小男であつたから、五尺三寸あまりの、ふとつた、大女の、お倉とならんで、あるくと、なにからなまでに、不釣り合ひに、見えた。が、吝嗇なほど儉約家であつたから、金まうけは、ふしぎに、うまかつた。それで、お倉とはんたいで、がさつなところなどほとんどなく、おとなしくて、口數がすくないので、『意氣地なし』のやうにさへ見えた。

ところが、その一年ほど前に、佐山は、寫眞器の製造を、おもひたつた。それで、まづ、簡単な寫眞器を、二つ三つ、解體して、それを、組み立てたり、また、解體したり、して、寫眞器の構造を、研究した。それから、いくらか、自信ができたので、佐山は、自分で、いろいろな材料を、買ひあつめ、

二階の一室に、ひきこもつて、やうやく、まがりなりに、一つの寫眞器を、つくる方法を、のみこんだ、(つまり、發明した) さうして、そのあひだ、佐山は、それらの事を、一さい、お倉にも『ないしよう』にした。

そこで、これなら、部分部分を、人に、うけおはせ、それをまとめて一つの寫眞器にしあげる職人を、かかへることにしよう、と、『はら』が、きまつた時、佐山は、はじめて、自分の『かんがへ』を、お倉に、うちあけた。さうして、部分品をつくる方法を、をしへ、それらを一つの寫眞器にしあげる方法を、知り合ひの二人の青年にをしへた。

さうして、それらが、みな、うまく、成功したので、佐山は、とりあへず、できあがつた寫眞器を、まづ、日本橋と銀座へんの、『これ』とおもふ、めばしい、寫眞器店に、賣りこむ、(買つてもらふ)『かけあひ』に、出かけた。

さて、その『賣りこみ』の『かけあひ』も、どうやらかうやら、まとまつた時、佐山は、あらためて、『しあげ』のできる二人の青年を、職人として、自分の家に、住みこませ、部分品をつくる(内職をする)人たちを、見つける『役』を、お倉に、いひつけた。

さうして、それらの事が、ことごとく、思ふとほりになつたので、佐山は、その一年ほど前から、小さいながら、寫眞器の製造人になり、半年ぐらゐ前から、寫眞器商を、はじめ

た。それと一しよに、寫眞器の附屬品も、あつかふことにした。

さて、一年ぶりぐらゐで、お倉は、佐山と一しよに、丈三郎を、たづねてきて、丈三郎が、醫者から、外まはりの商賣を、かたく、禁じられたことを、聞くと、そばにゐる夫に、ほとんど、『一』と言も、口を、きかせないで、いきなり、「そんなら、兄さん、『うち』の仕事をしてください、」と、いつた。

その仕事といふのは、寫眞器の『蛇腹』はりであつた。

その『蛇腹』はりの仕事の説明を、(その『やりかた』を)一と通り、説明してから、お倉は、ふと、丈三郎が強度の近眼であることに、氣がついた。それで、これは、丈三郎には、無理な仕事である、と思つたので、こんどは、お仙のはうにむかつて、すすめた。お倉は、もとから、お仙が、『むし』がすかないので、きらひであつたが、お仙なら、もともと、器用であるし、『蛇腹』も、たくさん、はつてくれる、と思つたからである。それは、また、佐山が、『蛇腹』をうまくはれる人がないので、困つてゐるのを、知つてゐたからである。

お仙は、お倉から、すすめられて、これも、お倉が大きなひであつたけれど、この内職は、賃金がい、と思つたので、膝をのりだして、あらためて、お倉に、『蛇腹』はりの『や

りかた』の、説明を、もとめた。さうして、すつかり、腑におちるまで、聞きただした。そこで、お仙は、すすんで、その仕事を、「わたしが、やつてみませう、」と、いつて、ひきうけた。

はたして、丈三郎は、ひどい近眼のせゐもあつたが、もともと、すわつてする仕事きらひな上に、こまごました仕事は生まれつき好まなかつたので、佐山のところから、その仕事の材料をとどけて來たので、ちよつと、やつてみたが、すぐ、「こんなもん、おれの性にはない、」と、いつて、はふりだした。

そこで、その翌日、佐山のはうから、はじめのあひだは、無理であるから、と、いつて、二三日、職人を、まはす、と、いつて來た。

すると、お仙は、そのをしへにきた職人がおどろくほど、早く、その『やりかた』を、のみこんでしまつた。しかも、なれるにつれて、お仙の仕事は、ますます、早くなつた。

それで、ある日、お倉が、こんどは、お仙を、たづねてきて、丈三郎と一しよに、自分の家の二階に、住んで、お仙に、そこで、今の仕事を、してくれ、「部屋代などは、いりません、……それで、仕事の賃金を、はらつて、そのほかに、兄さんの分もいれて、月に、三十圓の手當を、はらふ、と、『うち』の人が、いひました、」と、いつた。

お仙は、これを聞いて、二つ返事で、しようちしよう、と、思つた、が、前にのべたやうに、お倉が大きらひであつたばかりでなく、佐山も、『むし』がすかない上に、氣の知れない人間である、と、ふだんから、思つてゐたので、返事は、二三日、待つてもらふことにした。これは、丈三郎も、佐山を、前から、きらつてゐたから、と、かんがへたからでもある。

ところが、丈三郎は、自分に『はたらき』がなくなつたことを、ことに、病氣になつてから、いたく、氣にしてゐたので、家賃がたすかり、間代がいらない、といふことだけでも、すぐにも、こさう、といひだした。

また、お仙にしても、やはり、間代がいらないことと、仕事の賃金のほかに、月に三十圓はひる、といふことだけで、心が、うごいた。

そこで、この『はなし』があつてから、一週間ほど後、お仙は、わづかな家財道具は、荷車で、さきに、佐山の家まで、はこんで置いて、すこしおくれて、丈三郎の手をひきながら、まづ、長いあひだ住んでゐた、日暮里の家を、出て、それから、五六町ぐらゐある電車の停留所まで、行つて、電車に乗つた。その日暮里の小さな家が見えなくなる町角を、まがる時、丈三郎は、とつぜん、立ちどまり、うしろを、ふりかへつて、聲をあげて、泣きだした。「あんた、みつともない

ですよ、……」と、たしなめる、お仙も、しくしくと、すすり泣いた。

二人が佐山の家であてがはれたのは、二階の、六疊と四疊の、二た間あるうちの、四疊の部屋であつた。

四疊の部屋は、辛抱できなし、長いあひだ、(いや、二人が一しよになつたその日から、ずっと) 貧しい『くらし』をつづけてゐたのであるから、部屋代が『ただ』で、その上、三十圓の手當をもらへ、お仙が、ほとんど、朝から晩まで、『蛇腹』はりの仕事をしてゐたのであるから、いくらか、樂に、くらせる筈であつたが、お仙も、そのつもりであつた。

ところが、お仙は、人にさげすまれるほど『けち』であつたけれど、日に日に衰弱してゆく夫の有様を目にすると、自分のたべるものは儉約しても、丈三郎のために、肝油とか、生葡萄酒とか、その他、滋養になるものなら、何でも、買った。そのために、『たらぬがち』どころか、いくらあつても、たりなかつた。それで、お仙は、ときどき、夜あかしをするほど、仕事に、精を出した。

ところが、この佐山の家の二階にこしてから、はじめの一と月二た月ぐらゐの間はよかつたが、そのうちに、佐山の商賣が、しだいしだいに、『ひま』になり、しぜん、お仙の手があいてきた。さうして、半年ほど後には、まつたく、手が、あくやうになつた。そこで、お仙は、『仕立て物』の看板を

出すことにした。

お仙が『仕立て物』の看板を出した日から半月ほど後の、ある日の夕方、丈三郎は、立ちあがりかけて、とつぜん、ドスンといふ音をたてて、倒れた。少しはなれたところで、針仕事をしてゐた、お仙は、びつくりして、丈三郎のそばに、とんで行つた。と、丈三郎は、眞赤な顔をして、そのまま動けなくなつたやうな恰好をしてゐた。お仙は、おもはず、「あッ」と、さげんだ。と、今まで眞赤な色をしてゐた丈三郎の顔が、みるみるうちに、血の氣がひいたやうに、眞青になり、蒼白になつた。お仙は、あわてた、それから、むちゆうで、下の方(した)にむかつて、「だれか、来てください」と、さげんだ。

そのさけび聲を、聞きつけて、留守番をしてゐた、佐山が、梯子段を、かけのぼり、四疊の部屋に、とびこむと、あふむけになつて倒れてゐる、丈三郎の、かたはらに、お仙が、うつぶしになつてゐた。(お仙は、いつもよりおおい腦貧血をおこしたのである。)

まもなく、歸つてきた、お倉が、外出著のまま、あがつて來た時分に、お仙は、やつと、顔をあげた。顔をあげて、そばに、死んだやうな恰好をして、あふむけに、寝てゐる、丈三郎と、その丈三郎のむかう側に、おろおろしながら、なにも手につかぬやうな顔をして、中腰になつてゐる、お倉の

姿が、目にはひると、お仙は、とびあがるやうに、立ちあがつた。

お仙は、とつさに、丈三郎が、とつぜん、倒れたのは、ふだんから、のぼせ性であつたから、「これは、こまつた、腦溢血……」と、おもつた。そこで、お仙は、立ちくらみがするのを、こらへながら、はふやうにして、剃刀を、出してきて、寝たまゝの丈三郎の肌をぬがし、ふるへる手で、丈三郎の肩を、きつた。それから、大いそぎで、片隅に、蒲團をして、お倉に足のはうを持つてもらひながら、やつとのこと、丈三郎を、その上に、ねかせた。

ところが、それから五分もたたないうちに、丈三郎は、ふいに、むつくり、寢床の上に、起きなほつた。さうして、ふしぎなやうな顔つきをして、あたりを、きよきよろ、見まはしてゐるので、お仙が、なにか、はつとして、「あんた、……」と、いふと、丈三郎は、こんどは、ふしぎなやうな顔をして、お仙の顔を、穴があくやうに、見つめた。それから、いきなり、丈三郎は、なにか、わけのわからない事を、しゃべりだした。

さて、かうなると、佐山は、もとより、お倉までが、ふだんは、うらやましいほど、仲のよい兄妹でありながら、丈三郎を、『じゃまもの』にしだした。しぜん、お仙にも、「一日も早く……」といはんばかりの事を、いひ、さういふ、『そ

ぶり』を、しめした。

お仙は、思案にあまつた末、ふと、丈三郎が、玉子屋をしてゐた時分に、淺草の公園のなかの『うで玉子屋』で、元は大工をしてゐた者で、北海道から、ながれてきた、赤井といふ男を、見ず知らずでありながら、世話をしたことを、思ひ出した。さうして、その赤井が、今は、淺草へんで、ちよつとした『顔役』のやうなものになつてゐる、といふことを、思ひ出した。

お仙は、その赤井に、その頃、他の『うで玉子屋』連中の借金を取り立てを、たのんだ事があつて、赤井の居所を、おぼえてゐた。そこで、佐山の家の小僧に、赤井の所に、行つてもらふことにした。

赤井は、お仙の、まはらぬ筆でかいた、手紙をよんで、佐山の小僧が歸つてこないさきに、自轉車で、とんで來た。

その赤井の『はからひ』で、丈三郎は、たふれた日の翌日の午後、田原町の、田原町病院の施療科に、入院した。ところが、入院した日の翌日あたりから、丈三郎の氣ちがひめいた様子が、ますます、はつきりしてきた。その上、施療科といひながら、おもはぬ金がかかつたので、お仙は、また、赤井に、たのんで、淺草の傳法院のそばにある、淺草病院の施療科に、丈三郎を、入院させた。

お仙は、自分も、これまで、たびたび、大病をして、その